

言葉を渡す。



誰でもない

## 目次

聞くはいつときの恥、聞かぬは一生の恥（コウきり）	……3
文はやりたし書く手は持たぬ（コウ蓄あお）	……7
出る杭は打たれる（コウ蓄あか）	……13
後書き	……25

## 聞くはいつときの恥、聞かぬは一生の恥

五年生の時、担任となつた水奈瀬先生の授業は普通で可もなく不可もなくといった感じだった。わかりやすいが面白くはない。優しい先生ではあつたが、悪戯やいじりには少し厳しい先生。そんな、よくいるような先生だった。

強いて他の先生と違うところを挙げるならば時折混ざることわざだ。青は藍よりいでて、藍より青し、とか一葉落ちて天下の秋を知る、とか。正直言つて意味がわからないものの方が多く、他の子が率先して聞いていた。それなんですか、と。そうするとこれはこういう意味です、と言つたあと。聞くはいつときの恥、聞かぬは一生の恥です。よく聞きましたね、と言付け加えるのだ。

私は、たとえいつときであつても、恥なんてかきたくなかつた。だから、手をあげてわざわざことわざを聞くようなことはしなかつた。他の子がやつてくれるし、聞かなくなつて問題ないし、なんて思つていた気がする。

そのことわざの時もそうだった。プールの後の道德の授業だった気がする。うとうとと、眠気と戦つた記憶があるから。

正直内容は何も覚えていない。

たしか、命長けりや恥多し。だったか。そんなことを言つた。これは、流石に聞かなく

ても意味がわかった。そのまんまだなと思つた。だから、なんか、逆に面白かつた。そのあと、先生は珍しく自分の話をした。

「先生もこの歳になるまでいろんな恥をかいてきました。きつと、君たちも恥をかいていくでしょう。でも、大丈夫です。あなたより大人の方が恥を沢山かいてるに違いありません。みんな恥をかくんです。気にすることなんかありません」

とかなんとか。

なんだか私はその言葉に安心した。

恥をかくのか。みんな。

そうか。そうだったのか。そう思つて、私は眠つた。

次の日、先生は例にもよつてことわざを交えた授業をした。思い立つたが吉日であるという話です。と先生が言つた時私はいつと、手をあげた。

「ぎりたん？ どうしたのかな」

「どういう意味ですか」

「やるべきことはすぐにやれ、という意味ですね。今やるべきだと思つたなら、そうしようという。わかつたかな」

「はい、わかりました」

「ん、聞くはいつときの恥ですが、聞かぬは一生の恥です。いつでも聞いてくださいね」

そう言つて授業はまた再開した。

私は恥をかいた。だが、これからも恥をかいていくのだ。

バクバクする心臓を抑えて、ノートを改めて取る。

聞いてよかつた。

心底そう思った。

ああ、そうか、これが思い立つたが吉日か。



文はやりたし書く手は持たぬ

大して仲良くもない、どうでもいい子に「字、汚いね」と言われたことがある。それか  
らずつと、字を書くときに魚の棘が喉に刺さったような、そんな感覚に陥ってる。

「どうしたの？」

「あつ、えーつと……」

勤劳感謝の日におじいちゃんとおばあちゃんに手紙を書こうという授業。他の子たちは  
悩みながら書いてる中、一言もかけずにいると担任のコウ先生に話しかけられた。

不思議そうにこちらを見る青い目が嫌に刺さる。

「何書けばいいかわからない？」

「えーつと……その、それは、わかつて……書きたいことが……沢山で……」

言葉に詰まる私を待つとでもいうように、机の横に座り込む。

「……」

「どうしたの？」

黙ってたら何もわからない、と他の人ならいうだろうがコウ先生はただ待つてくれる。  
他の席の子がこちらを見ていような気がして、なんだか怖い。

それでも、少し鋭い目に見られると、思わず言ってしまうのだ。

「……字が」

「字が？」

「……汚くて」

そういうと先生は少し呆気に撮られたような表情をしていた。

「……葵の？」

「……うん」

同意とも、唸ったとも言えない声が出る。それに対して先生ははーと、ため息とも感嘆ともつかない声を漏らした。

「そんなことないと思うけど」

「……そんなことあるんです」

字が汚いとはあの子以外に言われたことはない。それでも、あの時の言葉がずっと刺さって抜けない。

いろいろな字を見るたびに、私の字が一層汚く映る。

「まるで文はやりたし、書く手は持たぬだね」

もやもやとした感情で俯していると先生はいつもの調子で話し出した。

「……なんですか、それ？」



「元々は恋文を出したいけど人に見られるような文章とか、文字とか、そんなの書けないよってなったんだけど、かと言って代筆を頼むのも躊躇するっていうことわざなんだ」

「……」

代筆って、なんだろうと思つたが多分他の人に書いてもらうみたいな意味だろうか。

「そもそも葵の字は汚くなんかないと思うよ」

「……汚いよ」

褒められてるのはわかるのに、それでもすぐに否定してしまう。

ああ、めんどくさいと先生は思っているに違いない。ますます俯いてしまう。

そんな私の気持ちを知ってかしらずか先生はなんでもないように告げる。

「……じゃあ、考え方を変えよう」

「え？」

「大きく字を書こう」

「……どうして？」

字が汚いのに、どうして大きく書くのだろうか。何も繋がっていない気がして混乱してしまう。

「そうしたら読みやすいから。太いペンかすから、そうしてみよう？ 下書きをきちんと

して、太いペンで、なるだけ大きく、読みやすくしよう」

そう言われて考えるが確かにそうかもしれない。でも。

「……でも、汚いのは汚いんじゃない」

汚い字が大きくなっても汚いだけなんじゃないだろうか。

「それでも、小さな汚い字よりも大きな汚い字のほうが読みやすいに決まってるよ。それにさ、ああ言えばこう言うのも、悪くないけど、案ずるより産むが易しだよ」

「……」

先生が何度も言ったことわざだ。屁理屈言わずにとりあえずやってみると言いたいんだろう。そうした方がいいのだろうか。でも、汚い字で渡したくない。

そうやって少しの間考え込んでいると先生が独り言のように呟く。

「それに、今後何回も手紙を出せるわけじゃないんだから」

「そうなの？」

「そうだよ……だから、葵がよかつたらそうしてみない？」

そう言われてまた考え込む。おじいちゃんもおばちゃんも大好きで、ありがとうって伝えたい。でも汚い字を見られるのは嫌で、でもでも、手紙を渡せない方がもつと嫌かも  
しれない。

「……わかった、そうする」

洩々そう先生に言うのと先生は少し嬉しそうな顔になった。

「じゃ、ペン持つてくるね。あ、みんなも色付きのペン持つてくるから周りに模様とか描いたりしてみてね」

「はい」

そうして、ペンをもらって授業が終わる頃には汚い字の手紙ができた。書き終えてからこれでよかったのか考えに考えたが答えは出ない。二人が喜んでくれるのかもよくわからない。

それでも、渡すことにした。

これから何回渡せるのかわからないけど、渡せなかったと後悔するのは嫌だから。

汚い字でも、なるだけ読みやすくしたから、伝えたいことはたくさん書いたから。

後悔だけはしないように、そう思つて渡した。

「おじいちゃん、おばあちゃん、コレ！」

勤労感謝の日にお母さんと一緒におじいちゃんとおばあちゃんちに行った。二人に渡す

時、心臓が止まっちゃうんじゃないかと思った。

二人は喜んでくれて、ほっとした。

ああ、渡せてよかったと本当に心から思った。

そんなことを考えながら、ふと、先生は手紙を何回渡せたのだろうか、そんなことを考えた。先生は後悔したのだろうか。

していないといいな。

## 出る杭は打たれる

父と母が再婚して、関西から関東に引越して、妹と同じ小学校も転校してわかったことは自分が浮いているということだった。

聞き慣れた関西弁は存在せず、標準語に溢れた世界。見慣れない番組に、よく知らないチェーン店。話が噛み合わなくて、疲れるのだが周りからすると私の話が噛み合っていないのだ。

家はお父さんとお母さんとも暮らせて、何より葵ちゃんが居るから楽しいけど学校だけは前の所のままがよかつたななんて思う。

先生のノリだつて違う。

真面目そうな、堅つ苦しい人で、授業中の雑談はことわざのことしかない。

「こつちの学校には慣れた？」

「……ぼちぼち？」

「そつか。ぼちぼちかあ」

放課後の、教室。二人きりでの会話は退屈だ。

未だにこの学校に馴染めていない私は担任と面談を行う必要があるらしい。こつちに引越してきて、三回目の面談。話すことは特にない。する必要があるので、正直わかつて

いない。

「何か困つてることとかない？」

「えー……せんせの授業クソつまらんこと？」

冗談混じりにそう言うのと、先生は軽く笑う。

「手厳しいな。まあ、真摯に受け止めるよ」

「……」

不発。前の先生やつたら笑つてくれたかもしれないのに。なんだかため息をつきたくなる

。そんな私を先生は見ながらそういえばと口を開く。

「君のお母さんから聞いた話で、まるで陸に上がった河童のようだと思つてさ」

「かつぱあ？」

河童。妖怪で、緑できゅうりを食べるあれだろうか。あまり、いい意味合いで使われているとは思えずついムツとしてしまう。

先生は慌てたように、否定する。

「あー、妖怪の河童は本来川の中にいる。だから、陸に上がったら本来の力が発揮できない……まあ、本領発揮みたいな意味合いだよ。例えというか、ことわざ」

またことわざか。そんな事を思いながらも言われた意味を反芻する。

「本領発揮かあ……」

「だから、困ってることないのかなって」

そう言うとき青い目がこちらに刺さる。

「……ないよ。なーんも」

私は、この先生のこと未だによくわからない。だから、何をどれほどどんな感じに話せばいいのかわからない。

「せんせ、もう帰っていい？」

「……うん。いいよ。また来週のこの時間に面談でいいかな」

「はい」

形式上やつてるだけなら早くこの面談無くならないかなと、思いながら適当に返事をする。

「じゃあ、またね。茜」

「せんせ、さよーなら」

そう言つて教室から出て、少し駆け足に下駄箱まで向かう。

別に、虐められているん訳でもない。ただ少しだけノリが合わなくて、たまに陰口を言

われているだけで。そう、よくある話だ。私が馴染もうと頑張ってるけど、上手く言っていないだけだ。

葵ちゃんは先に帰ると言っていたのに私はわざわざ葵ちゃんの下駄箱を眺めてしまう。当たり前前に靴はない。

ため息をついて自分の下駄箱から靴を下に落として、上履きから履き替えて、上履きを入れる。

帰ったら何をしようか。ゲーム……いや宿題が先だろうか。お母さん次第かな。ふと、帰り道、道の向こう側にある公園から声が聞こえた。

覗き込んでみると葵ちゃんとクラスで見たことがある人がいた。みんな楽しそうに遊んでいる。あそこにまーぜてといえれば私も遊べるのだろうか。

いや、そもそも別に私はあの子たちと遊びたいわけじゃない。ただ、浮いてるのが少し怖いだけだ。浮いていると、心配をかけてしまうから。

ふと、葵ちゃんがこちらを見た気がして早足で家まで向かう。玄関の鍵はかかってないから何も気にせずに扉を開けた。

「ただいまー」

そう言いながら靴を脱いで、揃える。すると少し立ってから返事。



「……おかえりー」

バタバタと音を立てた後リビングの扉が開いた。

「お母さん仕事？」

「うん。でもそろそろご飯用意しないとねー。あつ、買い物一緒に行かない？」

「ええよ」

そんな会話をしながら思う。明日もきちんと挨拶して、話題合わせないと、と。

一週間後、また面談が来た。

「最近はどう？」

「……普通でーす」

そう答えるとそつかと小さくつぶやかれた。

「……授業は？」

一瞬何を言っているのかわからなかった。

「授業？」

「僕なりに面白くしてみたんだけど」

そう言われて授業のことを思い返す。授業？ 面白く？ 面白く？ なにかあっただろうか。

「……あつ、あくなんか、あれ？ 授業中に世界のことわざ紹介したやつ……？ ですか？」

確信はないが、それ以外に思い当たることはない。

「うん。あの、面白い本を買ったからその紹介も兼ねてただけだ」

確か、学級文庫に世界のことわざだのなんだのと言った本を増やしたとか言っていた気がする。珍しく歯切れの悪い先生にはつきりと伝える。

「いや……そんなに？」

「……そっかあ」

「はい」

「……具体的には、どうつまらなかつた？」

「えっ？ えーつと……興味ない話題でなんか気分盛り上がり……身近じゃないし」

……そもそもノリが淡々と話すから合わへんってか……」

そこまでいってああ、これは自分にブーメランが刺さってるななんて思う。

私の話す話題は他の人からしたら興味ないやろし、関西の話をしてしまうし、クラスメイトとのノリは先生とかのが近くて騒がしいのとは違う。

「そっかあ」

先生の納得するような声で現実に引き戻される。

「いや、その、やっぱうちがぼーつとしてたから、うちだけつまらんだだけやったかもしれんし」

クラスメイトの中には真剣に聞いている子もいた気がする。私だけがどうでもいいと思っていたのかもしれない。

「……その、うち、ノリが違うから」

思わずそんなことを言ってしまう。

先生が何か言う前に言い訳するように、ベラベラと口が回る。

「いやほら、うち関西からきたやん？ それでさあ、なんかうちこつちとノリがちやうからさ。こないだも話のオチがなかつたからオチないんかい！ ってちよつとこづいちやつてさあ。もうみんなええ……って反応でさ。いやもうめっちゃ困っててん。いやこの話もおチないから人のこと言えへんよなあ！」

そんなことを言っても笑い声はない。絶対に地元ならえー、最悪やん！ とか声がかかるとの。何も無い。ただひたすらに無反応だ。

空気がどんどん悪くなっている気がする。

なにか、盛り上げないといけない気がする。なんだか喉が乾く。また、陰口を言われる

。葵ちゃんに心配される。気を遣わせる。それは、嫌だ。

話題を考えようとするとところで手をつかまれる。

「横槍を入れるようで申し訳ないけど、一旦、深呼吸しない？」

青い目でそう言われて、だんだん焦っていた気持ちが落ち着く。深呼吸を、何回かすると、手が離された。

そうして少しの間、沈黙が落ちた。西日が、目に刺さって眩しい。

「……出る杭は打たれる、ということわざがあるんだよ」

不意に、先生が口を開く。また、ことわざか。そんなことを思いながらも思わず聞いてしまう。

「……どういう意味なんです？」

「輪から出過ぎた振る舞いを行うと嫌われるとか、才能ある人は妬まれて邪魔されたりつていう意味」

「へー……」

輪から出過ぎた。そうなのだろうか。先生はそう思っているのだろうか。少し、胸が痛くなる気がした。思わず俯いてしまう。

「……でも、僕はこのことわざが……はつきり言つて嫌いなんだよ」

そう言われて少し顔を上げた。

「そもそも才能ある人を妬むことは仕方ないと思うけど、その人の邪魔をするような行いは恥ずべき行為だと思ってる。みんな揃って一等賞でできない子が救われたとしても、優れている人は救われることはない。それに輪を乱すということは推奨される行為ではないけど、それを頭ごなしに一緒になれというのだから、僕はどうかと思う」

先生の表情は本当に不愉快だとも言うふうに見える。

「だから、茜が何か馴染めないことで悩んでいるなら力になりたいし、もしもそのことを本当に気にしてないのならそれはそれでいいと思う」

「……せんせつてさあ」

そこまで言われて、思わず声が出た。

「なんか、教師つぼくないよなあ」

みんな揃って一等症に何かを感じたことはなかった。馴染めないことを悩んでいるのだとずっと思っていたが、そもそも馴染む必要がないのだとは思ったことがなかった。

だって、それが当たり前で、それが教わってきたことで、だから、今まで教わってきたことと違うことを教えてくる先生は教師つぼくない。と思ったのだが先生は困った顔をしている。

「……それは、どう言う意味で？」

「いや、うーん……褒め、てる？」

「じゃあ、ありがたく受け取っておくよ」

「その割には嫌そうやなあ」

「まあ、複雑……だね。だいぶ」

「そこまで話してふと思った。」

「先生も出る杭やったりすんの？」

「そう聞くと先生曰く複雑な顔からいつもの顔になる。」

「それは、あるかもしれないな」

「そう言われてなんとなく言つてもいいかもしれないなんて思う。」

「……あのさ、例えやねんけどさ、うちが出る杭やとして、打たれてること、うちは気にしてないんよ。でもな、周りがきいつかうねん。どしたらええの」

「……それは、気を使うのもわかる」

「ええ……」

「でも、ことわざではないけど出過ぎた杭は打たれないという言葉もあるから、思い切つて飛び出してしまふのもいいかもしれない」

その言葉になんだかいいいなと思う。

「うちそつちがいい」

「そつか。じゃあ、本とか読んでもいいかもしれない」

「なんで？」

「基本的に学校に持ち込んでも怒られないし、一人になれる理由になるから」

「えー、でもなあ……」

「まあ、どう言うのでもいいと思う。ゲーム好きとか言っただけじゃなかったっけ」

「あつ、好き」

「じゃあ、持って来ちゃダメだけどゲームもいいかもね。何にしても社会と断絶しない程度に楽しむといいよ」

「断絶？ つてのしたらあかんの？」

「道は幾つでもあった方がいいからね」

「うーん？」

「……小説を読むことは読解力を鍛えることに繋がるから、暇なら読んでみてもいいと思うよ」

「そーする。せんせのいうこと、たまによくわからんし」

「聞くはいつときの恥、聞かぬは一生の恥だからいつでも聞いていいよ」

「ほな、そうする」

引越して、家以外に楽しいことはなかったけど、先生との会話は悪くないかもしれない。  
い。

無理して馴染まなくてもいい大丈夫。

出すぎた杭は打たれない。

そんなことを考えながら先生と日が暮れるまで話し続けた。



あとがき

水奈瀬コウの誕生日を祝いたかつたのですが全く祝う話にはなりませんでした。そもそも誕生日ではなく発売日だしいいかと思つてます。

きりたんの話はとても綺麗にできたなあと思います。憧れの人にも褒めてもらえて嬉しかった……。とても嬉しい……。

同人誌にしようと思ったのは本当に最近のことなのでこれどうなるんでしょう。ていうか見直してないので誤字はどれだけあるのでしょうか……怖いよ……不安だよ……。でもしたいことができたので満足です。多分いつか、加筆修正してちゃんと形にする……。表紙絵もちゃんとしたのを書きます……。



奥付

言葉を渡す

サークル 遣り残し

作者 誰でもない

連絡先 aholeopens@gmail.com

pixivID user\_xxzt2784

プリント セブナイレブンマルチコピー機

2021/10/29 発行

転載、ネットオークションはおやめください。ご協力お願いします。